

健康にいいオペラ・オペレッタ

～二期会「メリー・ウイドウ」によせて～

国際医療福祉大学大学院院長・開原成允

私は医学を専門としている。

いつの間にやら、オペラの虜となり、これまでに見たオペラの数も200近くまでになった。今では、その鑑賞記録をパソコンに蓄積して、歌手と役柄や演出家による違いなどを分析して大いに楽しんでいる。

オペラ・オペレッタにはいろいろなものがあるが、やはり楽しい舞台を観たあとは気分がいい。中でも上質のオペレッタは何度観ても楽しい。

こうした楽しい気分になったり、笑ったりすることが、ストレスを解消し、免疫力を高めて健康にもいいことは医学的にも証明されている。

今日の『メリー・ウイドウ』は、『こうもり』と並んで、私の最も好きなウィンナ・オペレッタである。

ウィーンでは19世紀末から20世紀初めまで、こうした楽しいオペラが多数作られ、もてはやされたが、その繁栄ぶりは時代背景が大いに関係したのであろう。当時、ウィーンはオーストリア＝ハンガリー帝国の首都として、ハプスブルグ家のお膝元であり、「世紀末文化」といわれる独特の文化が栄えた。

レハールと並び、画家のグスタフ・クリムトやエゴン・シーレ、作曲家のグスタフ・マーラーやアーノルト・シェーンベルク、精神分析のジークムント・フロイトなど名を馳せた面々は、皆が同時代にウィーンで活躍した文化人である。

マーラーは晩年フロイトに診察を受けていたといわれている。

医学者としては、胃がんの手術に初めて成功し、今でも胃の手術に使われている「ビルロード法」の発案者として著名なテオドール・ビルロートも当時ウィーン大学で教鞭をとっており、ブラームスと親交が深かった。

この頃、ヨーロッパ周辺では戦争もあったが、ウィーンはそれなりに平和だった。その文化土壌が楽しい舞台作品を育んだのだろう。

ところで、そのウィーン文化の一つとして楽しいオペラやオペレッタには、恋の駆け引きの手段で、「登場人物の入れ替わり」が非常に効果的なことに気付く。

例えば『メリー・ウイドウ』では、主人公のハンナがヴァランシェン又と入れ替わるし、『こうもり』でも「入れ替わり」がふんだんに提供されている。また、遡ってウィーンの前輩モーツァルトの『フィガロの結婚』『コジ・ファン・トゥッテ』『ドン・ジョヴァンニ』にも、同じように人物が入れ替わり、浮気を暴いたり、うまく

逃げおおせる場面がある。

予め観客は分かっているにも拘わらず、舞台の歌手の入れ替わりに全く気付かぬさまが皆の笑いを誘う。さらに「入れ替わり」は後輩のリヒャルト・シュトラウスでもウィーンを舞台にした作品に多く見られる。こうした脈々としたウィーン気風に着眼するのは、遺伝因子にも配慮する医学者の性ではなかろう。

職業柄、もう一つ気になるのは、劇中の医師である。

医師が登場したとしても、『ラ・トラヴィアータ（椿姫）』終幕のグランヴィルのように、ただ「ご臨終です」というだけで、主役とは言えないのが多い。

しかし、前出『ゴジ・』に出てくるデスピーナが扮する偽医師は実に傑作な医師である。アルバニア人に化けた恋人が、恋が成就しないために毒を飲んで自殺するふりをすると、偽医師が大きな磁石を持って出てきて生き返らせる。

この場面でなぜ磁石を持って出てくるのか不思議に思われる方もあると思うが、これは当時のウィーンにアントン・メスメルという一世を風靡した「磁気療法」を行う医師が実際に存在したからである。磁気療法というのは、人の病気は磁気不足のために発症すると考えて、暗い部屋の中で患者に鉄棒を持たせ磁気を補給する暗示をかける。

この治療法は今からは、いかがわしい治療法といえるが、当時は非常に人気があった。現在一種の催眠療法と考えられ、催眠術をメスメリズムということもある。

さらにウィーンの作曲家アルバン・ベルク『ヴォツェック』中の医師もある。

この医師は、哀れな主人公ヴォツェックを実験台に使い、彼にそら豆以外のものを食べることを禁じ、偏食が精神異常をもたらすことを証明しようとする。

今の医学界ではこのような乱暴な人体実験を行うことはないから安心していただきたいが、『ヴォツェック』の戯曲が書かれた20世紀初頭、まだこうしたことが実際に行われていたのだ。

因みに、この台本を書いたゲオルク・ビュヒナーは医学者でもあったので、それだけに私は大変気になるのである。

さて、楽しいオペレッタから話が暗くなったが、その後、暗いオペラが創作されるのも時代の色濃い影響であると思う。第一次世界大戦が勃発。オーストリア＝ハンガリー帝国はハプスブルグ家と共に崩壊。第一次世界大戦後にウィーンもナチズムが台頭してくるからだ。

『メリー・ウィドウ』を作曲したレハールも、その時代から逃れることはできない。夫人がユダヤ人である故に、オーストリアを併合したナチスから無縁ではいられず、弾圧を受ける。

しかしヒトラーはレハール作品を好み、幸運にも夫人はアウシュヴィッツ行きを免れたが、彼のオペレッタの台本を書いたユダヤ人作家たちを救うことはできなかった。このためか、以降彼は戦後まで生きたのだが、オペレッタを全く書かなくなった。

時代と共に、ウィンナ・オペレッタの黄金時代は終焉し、2度とこのような楽しいオペレッタは生まれなかった。

21世紀になった現代、できればまた、楽しいオペレッタがたくさん作られ、また上演される時代になってほしい。

皆がそれを観て楽しい気持ちになれば、健康にもなり、現在の困難な世の中を生きていく元気も湧いてくるであろう。その意味で、今回の二期会の『メリー・ウイドー』公演に大きな期待を持っている。

(開原先生は、2011年1月12日に急逝。これが遺稿となりました)